会に書院の問題を通じまして、日中間の非常に多面的ではありますが、研究上での友好促進を図っていきたいと考えておりますので、今後皆さん方のご協力も合わせてお願いできたらと思っております。なお、われわれもこれを機会に、昨年からかなりいろいろなイベントを企画して進めておりますので、ご注目いただければと思います。少し挨拶が長くなりましたが、早速午前中の第1部の発表に移らせていただきます。用意をいたしますので、少しだけ時間をください。

司会　それでは、午前のセッションを始めさせていただきます。各発表は20分です。各発表のあとに質疑応答をはさみますが、時間はかなり限られていますので、この時間は単純な事実関係のみの質問をお受けすることにしまして、午後のセッションをすべて終わったところで質疑応答の場面を設けたいと思います。よろしくお願いいたします。では午前のセッションを、藤田教授、よろしくお願いいたします。

1.「中日の共同歴史研究による両国民の友好促進」

葉　敦平

藤田　引き続きまして、私のほうで午前中の司会をさせていただきます。今日のトップバッターですが、先ほどお話しをいただきました上海交通大学の葉先生からお願いいたします。テーマは、「中日の共同歴史研究による両国民の友好促進」です。それではよろしくお願いいたします。

葉　東亜同文書院と交通大学、交通大学はもともと交通大学という名前ですが、いまは上海交通大学という正式名称になっています。その歴史ですが、交通大学というふうに当校の歴史を語っております。二つの内容について今日はご紹介したいと思います。

一つは、東亜同文書院と交通大学の歴史関係についてです。この関係はいくつか調べまして、大まかにいうならば二つの内容に分けられると認識しております。第一の内容ですが、1917年から1937年の20年間の歴史です。この歴史は、交通大学と東亜同文書院が隣同士の関係にあったというものです。同文書院は最初に南京に設立され、その後上海に引っ越しをして来ました。上海でも、最初は場所を借りて運営していました。そして徐家匯というところに移ってきました。これが虹橋路の東亜同文書院の校舎になります。この虹橋路ですが、同文書院と交通大学とは当時本当に近い距離でした。いまは華山路というところですが、まさに道一つを隔てた関係で、隣同士というのにふさわしい場所にあったわけです。

この20年間、双方にはいろいろな親しい行き来がありました。特に当時の両校の学生たちの交流は密接に行われていました。私たちの調査によりますと、主な行事で三つあります。最初の交流は、社会や政治運動に参加をしたというものです。書院の中華部にも学生会があり交通大学にも学生会があったわけですが、両校の学生会はいずれも上海学生連合会に加盟していました。この二つの学生会はお互いに協力をしながらいい関係を保って、いろいろな活動に参加したのです。たとえば、貧しい学生たちがお金がない場合に、学生たちが組織立てていろいろな募金をする、チャリティーのようなことをしたりしました。

さらには、上海学生連合会の組織の改革です。上海学生連合会があったという話をしましたが、交通大学と同文書院は学生の代表を連合会に送っており、幹部をしていました。当時の連合会の執行委員には、交通大学の鐘森栄という人が出席をしました。同文書院側からは沈道叔という人が役

員にあたって、お互いに協力をしていました。これは主に対外的な連絡をし合うという役回りでしたが、協力しあって、このときの学生組織のうえでいろいろなことをやっていました。また当時の学生は、ともに上海で行われた労働者ストライキの支援に行っていました。

また、両校の学生が一緒に北京や天津に赴き、1925年に起きた五・三〇事件の真相についての宣伝を行いました。北京や天津の人はそういったことについてよく知らないということで、五・三〇事件について宣伝をしに出かけました。また、当時日本帝国主義が中国の東北部を侵略占拠したときに、両校の学生がともに立ち上がり抗議をしたこともあります。また、同文書院の学生が除籍されるようなことがありますと、交通大学の学生がその学生の声援にあたるようなこともよくありました。

二つ目に両校の学生たちの活動は、進歩的な組織の設立を実現したことです。1924年から27年にかけては、中国国民党と中国共産党が協力した時代でした。交通大学、同文書院は、いずれも徐家匯地区にありました。この地域は進歩的な思想を持った学生たちが集中したところでもあり、お互いに連絡を取りながら協力をとっていました。1924年に徐家匯では国民党の区の支部が設立されましたが、当時交通大学と同文書院は、いずれもこの国民党区支部に属していました。この支部では党員が7人いて共産党組織もできていますが、徐家匯支部の共産党員7人はいずれも同文書院と交通大学の学生でした。

この共産党支部の書記は、同文書院側の梅龔彬が担当していました。この梅龔彬が、交通大学の張英和、陸定一などを紹介して共産党に入党しました。東亜同文書院は、進歩的な活動の拠点となっていたわけです。そして1930年代の初頭、交通大学の党組織は政治的な雰囲気がより緩やかな同文書院の中で活動を行ったこともあります。これには、同文書院の中華部の学生や日本の学生も加わっていました。たとえば白井行幸でしょうか。そして水野茂、中西功、安斎庫治といった人たちも進歩的な思想の影響を受けた人たちで、中国の共産党青年団に加わり共産主義の宣伝をし、当時の日本軍国主義の侵略に反対し、中国の革命活動を支持したということがありました。これが二つ目の活動です。

三番目は、いろいろなスポーツの交流がありました。お互いに近いこともあり、両大学ではよくスポーツの試合が行われていました。いまでいうクロスカントリーや野球、ビリヤードなどを一緒にやりました。さらには交通大学で合同の陸上大会が行われ、中国の学生、日本の学生も参加して親しく友好を深めたわけです。このように、この20年間、関係はかなりよかったといえると思います。これが第1の段階です。

第2の段階は、1938年から45年の7年間です。この7年間は、同文書院側に占用、占拠される関係でした。1937年に七七蘆溝橋事件があり、その後日本は全面的に中国侵略戦争を発動し、上海では上海事変を起こし、呉淞戦役が勃発しました。日本の侵略戦争は中国人民には多大な苦難をもたらし、交通大学の教職員、学生にもいろいろな苦難や不幸をもたらしたわけです。

そのころ交通大学は、上空でよく日本軍の飛行機が旋回、偵察をするということで、授業も普通に行うことがままならず、また教職員や学生たちの身の安全も深刻に脅かされており、交通大学はフランス租界に移っていきます。そこでは日本軍からの空襲や飛行機の旋回はなかったのですが、もともとの交通大学のキャンパスは当時難民所と化しました。大量の難民が上海に流れ込んでいた当時、交通大学のキャンパスを借り上げるかたちで難民収容所とし、1937年の12月まで使われていました。そのころ東亜同文書院は、上海から日本の長崎に移っていました。つまり、虹橋路の同文書院は焼けてしまったからです。何とか上海に戻りたいと思っても、その場所がなくなってし

まったのです。交通大学はその後日本の憲兵の駐屯する所となり、図書館が憲兵分駐所となりました。

それ以降、同文書院は元の校舎が焼けたということで、交通大学のほうに来たいと思ったわけです。交通大学はここでは授業はできないということで、一部はフランス租界に移り、もう一部は重慶に分校をつくりました。このときは、交通大学にとって大変苦難の年代であり、この歴史は交通大学にとってとてもつらく悲しい歴史です。そういった苦しみを乗り越えて、ぜひとも親しい友好関係を築きたいと思っております。20年はお互いに隣あったわけですが、その後7年間の占拠された時代については、これまでは十分な研究がなされてこられませんでした。最近になって、それについていろいろな整理や調査をするようになりました。まだ調査や資料は不十分ですが、これからもこの研究はしていかなければいけないと思っております。

二つ目の大きな問題についてご報告したいと思います。愛知大学や上海交通大学の友好関係ですが、1945年から1971年は、政治的な原因から両国の交流はほとんどありませんでした。1972年になりますと両国関係が正常化し、中国の文化大革命が終わると、1979年を迎え日本の方たちが少しずつ中国を訪問されるようになりました。お越しになった方たちの中には、当時東亜同文書院で学んだ方たちがいらっしゃいました。たとえば79年5月30日には、書院の32期でいらっしゃる前田八束さん、28期の小島桂吾さんが交通大学にお越しになりました。6月24日には、書院の44期の方で小野勇三さんがいらっしゃいました。7月13日は国連のユネスコ専門員であり、また書院の42期の河野靖さんがいらっしゃいました。この訪問は、いずれも交通大学にいらっしゃったわけです。かつて、この徐家匯の同文書院で勉強されたことがあるということです。中国のいろいろな経緯や人生の曲折を見たり聞いたりして、多くの方は本当にすまない、申し訳ないという気持ちを持たれていたそうです。そして中日友好を願い、またさらに交通大学を訪れられました。

1980年代になりますと、中国の教育部が若手の教師中心に300人を日本に派遣しました。交通大学からは、童澄教といった若い生徒が行きました。そのとき、書院の45期の方で吉川さん、殿岡さんが交通大学から来た人がいるのではないかといろいろ尋ね、9月にはこのお二人が東京で上海交通大学の学生などを訪ねまして、本当にいろいろな支援をして手助けをされたことがありました。また1981年に、吉川、殿岡両氏は上海交通大学を訪れています。

また、書院の出身者である団体である虹橋会というのができました。そして交通大学側に日本訪問を要請し、同文書院の卒業生とはいろいろな連絡をして、最終的に交通大学の日本訪問が実現しました。1980年に交通大学が日本に訪問するきっかけを得ますと、日本との連携はますます深まりました。当時は、書院の43期の宮家愈氏がいろいろなことをしてくださり、上海交通大学との関係はさらに深まっていきました。

いろいろな努力をされまして、多くの日本の企業家を理事会の会長や副会長などを担当するように働きかけ、企業家の資金的な支援なども得られるようになり、とてもいい関係を築いていきました。そして書院44期の学生で当時神戸学院大学の学長を務めていた倉田旭士さんが交通大学を訪れられ、交通大学と学部同士の友好関係の提携をしました。

今日もご在籍の46期出身の北川先生は証券関係のお仕事をされておりまして、ちょうど市場経済が始まったばかりのころに中国にお出でになり、いろいろな講義をしてくださいました。これは中国の発展にとって大きな役割があり、貢献をされました。このような写真が残っています。それ以外にも41期の菅野俊作さんは、中国留学生のためにお金を工面して、わざわざ思源寮という

宿舎をつくられました。

交通大学が日本を訪問する。また日本の方が交通大学を訪問する中で、いろいろなことがありました。特に天皇皇后両陛下も交通大学を訪問されるということで、関係はさらに進展しました。また、愛知大学のこれまでの学長、そして新しい学長も交通大学を訪問され、私どもの学長もお会いしております。こうした中で、長年の交流は曲折もありましたが、やはり友好的な関係があります。中国人民と日本の人民は、友好的な関係が保たれてきました。中日関係をもっと発展させるための研究をこれからもしていきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

藤田　ありがとうございました。これまでの上海にあった時期を二つに分けられ、前半期、書院と交通大学はお隣同士に存在していました。そういう点で学生諸君の間でかなり緊密な友好関係があったということです。その後書院の校舎が焼かれてから、書院が交通大学に入ったということで、後半のほうは前半とは少し違う時代に入っています。しかし、戦後は多くの方が両校の間に行き来をして交流を深めてきているというお話をいただきました。

少し時間がございます。何かご質問はございますでしょうか。どうぞ。お名前等、お知らせください。

坂下　葉先生、お話をありがとうございました。私は葉先生がお話しされた第2の時期になりますが、1939年、書院40期として海を渡って上海に行きました。当時バンドの大廈高楼、南京路の人山人海は、ものすごい人たちでびっくりしました。何しろ田舎から出ていったものですから、すべてに圧倒され戸惑ったわけですが、わずか17歳の私にとって初めての経験でした。

1939年といいますと第2の時期で、長崎から上海の虹橋路に帰ったあとです。虹橋路の建物は戦争で被害を受けて全滅していましたので、交通大学に入りました。そのときは大内暢三先生が学長でしたが、「これは交通大学から借りたものだから、大事に使いなさい」と言われたことを覚えております。

当時交通大学の一角、西寮といいましたが、飲水思源といいますか。いまでもあります泉の近くに、大きな運動場がありました。運動場はまだ避難民が去った直後で大変荒れていましたが、その一角に立った私は、そこに生えている雑草が私の田舎の田んぼに生えている雑草と同じであったため、これは異国ではないと思って大変安心したことをいまだに覚えております。それが中国に対する第一の印象です。

葉先生のご説明の第2の時期の最初の学生でしたので、簡単ですが、感想を一言申し上げました。ありがとうございました。(拍手)

藤田　ありがとうございました。葉先生、何か一言ありますか。

葉　交通大学に行ったときの感想だと思います。本当に日本の方と接しますと、こういう感想をお持ちの方が多いと思います。もちろん当時の交通大学といまとはずいぶん違っていますが、大きな施設面では当時と同じです。その運動場などもほぼ同じだと思います。

藤田　ありがとうございました。では、時間ですのでこれで終わらせていただきます。どうぞ拍手をお願いします。(拍手)